



次は自分が助ける番

⑮3 ペルーから曾祖父の母国へ

ナスカの地上絵のポスターが貼られた扉を開けると、研究室のあちこちにペルーの国旗や見慣れない形の笛、表情豊かな人形が飾られている。ソファの上にはカラフルで大きな布が広げられている。「ペルーのマントです。この下には書類がたくさんあります。なかなか片付かないので目隠しに使っています」。部屋の主であるオチャンテ・村井・ロサ・メルセデスさん(40)は恥ずかしそうにする。

ペルーの首都リマで生まれ育った。南米の風を感じさせる品々は故郷の土産物だ。

大阪の桃山学院教育大学で准教授を務める。教員を目指す学生がたくさんいる学校で、1990年代以降に日本に移り住んだ外国籍の子ども、いわゆる「ニューカマー」の教育を研究する。

指導するゼミの学生には、外国籍の子どもたちの宿題を手伝ったり、交流したりする機会をつくる。4月から小学校の教員になるという学生は「国籍を含め、今の学校にはいろいろな児童がいる。ゼミでの経験が役に立つはず」と言う。

国や自治体に依頼され、オチャンテさんはニューカマーの課題について提言する機会も多い。外国から移り住むなどして、日本語指導が必要な子どもたちをめぐる状況は厳しい。一般的な日本人に比べて高校の中退率は高い。高校を卒業しても非正規雇用の職に就く傾向もある。「今は韓国も中国も人手不足。その中で日本を選んだ人たちを孤立させてはいけない。子どもの教育が重要なんです」と話す。

自身も日系4世のニューカマー。母方の曾祖父が旧大山町出身だった。96年12月に兄弟や祖父母と共に15歳で来日した。

◇

高層ビル群に囲まれ、最先端のテクノロジーが街中を覆う。にぎやかに人が行きかう。ショッピングするにも目移りしてまうほど店がある。4半世紀前のオチャンテさんは、日本にそんなイメージを抱いた。しかし、連れてこられたのは三重県伊賀市という小さな地方都市だった。大阪と名古屋を結ぶ国道があり、たくさんの工場がある街だった。

90年代のペルーはハイパーインフレに見舞われ、人々の生活は大きく混乱した。一方で、日本は労働力不足を補おうと、入国管理法を改正し、日系人の定住を促した。

オチャンテさんの両親も日本で働くことを決めた。自動車部品の工場で働き、生活の基盤を整えた。ペルーに残した家族を呼び寄せられたのは、入国から5年後だった。

オチャンテさんが最初に暮らした公営住宅は、ペルーの家よりも狭かった。でも、両親のそばにいられてうれしかった。一家はカトリック教徒だ。日曜日になれば家族で教会に通った。信徒に「頑張って」と言われたことがあった。初めて耳にする日本語の響きが印象的だった。父が意味を教えてください。「頑張る」。何度かつぶやいた。

富山にある曾祖父の実家にもあいさつに行った。ルーツがある富山は雪国だと聞いて育った。12月の富山は三重と違い、見渡す限り真っ白な雪に覆われていた。空気がひんやりとしていた。

曾祖父の実家の人たちは盛大にもてなしてくれたが、片言の日本語しか話せず、気恥ずかしかった。目を伏せていると母に怒

た。父は「家庭教師でも付けて日本語をしっかり勉強させたい」という考えだった。しかし、学校に「他の生徒も働いている。生きた言葉が身に付く」と勧められた。バイトが終わると、授業開始より30分早く登校した。熱心な教員が日本語を教えてください。

大学に行きたかった。ペルーにいた頃からカウンセラーになるのが夢だった。人と話すのが好きだし、心の動きに興味があった。ボランティアで日本語教室を主宰し、家族ぐるみの付き合いがあった菊山 順子さん(60)は「心理学を学んでも、仕事に直接つながらないでしょう。だから『看護学部もいいよ』と言ったんです。でも、ロサは頑固ですね。思い込んだら一直線」と笑う。

親元を離れ、京都にある大学の心理学部に進学した。学費は高校時代のアルバイトでためたお金を充てた。日本語がすっかり上達した大学3年の夏休み。母校の中学校から、ニューカマーの子どもたちの学習支援に



「胡蝶楽」西 治子

協力してほしいと頼まれた。

生徒たちと交流してみて、分かったのは当時の自分と同じような悩みを持っているということだった。「しばらく離れていた親とコミュニケーションが取りづらい」「日本での将来に不安」「学校になじめない」。大なり小なり、かつての自分が感じていた悩みだった。彼らのことをもっと知りたいと思った。大学院に進み、日本に暮らす外国籍の親子の関係を研究することにした。

◇

修士課程を修了後は巡回相談員として外国人の子どもたちや保護者の悩みや困りごとを聞いた。地域によって支援体制が異なることが気になった。外国人に対して熱心なボランティアがいる地域もあれば、いな

い場所もある。日本語力に応じた高校入試の特別措置や、外国人の生徒向けの特別枠の有無も自治体によって異なることも知った。「現場の活動には限界がある。もっと別の立場からニューカマーや保護者の声を代弁しないといけない」と思った。在野で論文を書き続け、大学教員の仕事を得た。

大学教員の肩書きを得ると、講演を依頼されるようになった。グローバル化による社会の変化に伴い、外国籍の子どもたちの現状に関心を寄せる人は多い。壇上で届けたのは、自身の実体験と当事者の声だ。そして、子どもを支援する意味を訴える。「生まれたのが外国でも、彼らの多くが日本で生きる。日本語を覚えて自己実現して、社会に貢献できるようになるのは日本人にとってプラスなこと。行政や学校だけでなく、地域で子どもと親を支えるべきなんです」

大学で職を得たことについて「あなたが優秀だったからでしょう」と言われることがある。でも、そんな自信はない。人生の節目で、たくさんの日本人が背中を押してくれた影響の方が大きいと思っている。

ボランティアグループのメンバーがことあるごとに翻訳や通訳を買って出てくれた。卒業した大学の存在は、一家で通っていた教会の神父から教えてもらった。日本語に不安があったオチャンテさんにとって有利な入試制度の利用を勧めてくれた人もいた。大学での就職口を教えてください。学生時代から世話になった教授だった。「自分で頑張った部分はあるけれど、他の人より努力したとか、勉強ができたというわけではない。みんなのサポートがあったから今があるんです。次は自分が手助けする順番」と力を込める。

◇

曾祖父はきっと強い覚悟で富山を飛び出し、ペルーに渡った。そして戻ることはなかった。そのひ孫の自身が日本にいることに不思議な縁を感じる。「今の私にとってペルーは『行く場所』で日本は『帰る場所』。ここに助けないといけない人がいるし、生きがいがあるんです」

オチャンテさんの父は仕事の傍ら、民俗音楽のバンドを日本で組んでいました。音楽活動を通じて、地元の人たちとの距離を縮めました。慣れない異郷での生活にはさまざまな困難がありましたが、故郷の音楽を奏でることが心の支えになっていました。6年前に亡くなりましたが、日本で活躍する娘を誇らしく思っていたはずです。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は2月1日(火)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局